

発行所(郵便番号100)
東京都千代田区丸の内2-4-1
丸の内ビルディング781号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel. (212) 4007-1447
編集責任者 高須 裕三
印刷所 関東図書株式会社
定価150円(年間購読料貳千円)
1974年10月25日 発行
第6巻 第10号
(毎月1回25日発行)
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 6 No. 10

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No. 781, Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

スウェーデンの犯罪防止委員会について

Brottsförebyggande Rådet

家庭裁判所調査官

坂 田 仁

Jin Sakata

本年6月1日より犯罪防止委員会が発足した。犯罪の増大、とくに少年犯罪の増大と麻薬問題はスウェーデン社会の最近の暗い面を示していると思われるが、この委員会はそうした背景に立って構想されたものであろう。これは政府直属の委員会であり、我が国の中央青少年問題審議会に似ていて、関係各機関の連絡調整をはかりながら、犯罪防止に関する国の総合的施策を企画推進する目的をもっている。

犯罪対策には大きく分けて2つの方向がある。ひとつは一般予防というべきもので国民一般を犯罪から防ぎ、社会防衛をはかるものである。他のひとつは一度罪を犯した者に対してその社会復帰を促進する個別予防の方向である。これまでの刑事政策ではこの後者の方に重点がおかれ、前者については比較的等閑視されていたといつてよい。一般予防は時代遅れの考え方だともいわれ、人道的、科学的刑事政策は個別予防の宣伝文句のように言われて来た。しかし、「一旦犯罪を犯した者をどのように扱うかということも重要だが、一般の人をして犯罪を全く犯さぬようにすることも重要なのである。」科学的、合理的な方法による一般予防が成功すれば、犯罪のない社会は夢でなくなる。犯罪防止委員会の主目標はまさにこの点にあるといつてよいであろう。

さて、犯罪防止委員会、スウェーデン語の原名はBrottsförebyggande Rådet というが、この委員会の職務は次のように規定されている。

(1) 犯罪現象の発展を追求、分析し、その将来の

発展を予測。

- (2) 社会の犯罪問題の研究と解決作業とを追求、援助、発議することおよび研究結果を評価し、一般に広める。
- (3) 委員会の活動領域に属する立法作業が社会の発展段階に応じたものになるように活動する。
- (4) 刑事政策の領域の国際的な発展に特に注意を払う。
- (5) 異なった社会機関の犯罪対策の調整。
- (6) 犯罪と犯罪対策に関する研究調査活動の調整、企画、推進。
- (7) 犯罪防止活動の全体の相互協力を目的とした他の官署との協働。
- (8) 民主的社会における刑事司法の構成と職務についての原則に関する情報の提供。

委員会はこれらの目標を実現するために次のような作業部会を下部組織としている。

- (1) 犯罪防止部会：社会および企業の側から犯罪の機会の発生を妨げ、犯罪の実行を困難にする

No. 10 目 次

スウェーデンの犯罪防止委員会について……………坂 田 仁…	1
アサール・リンドベック教授を迎えてシンポジウム、研究会など開催……………	3
日瑞留学生を囲む会でのスピーチの紹介(第2回)……………	4
滞瑞の印象……………中村尚司…	7
スウェーデンの経済社会ニュース……………	9

諸措置がとられるように活動する。ここでいう犯罪には交通犯罪、環境犯罪、租税犯罪、通貨犯罪がふくまれる。

- (2) 予測部会：従来法務省内の犯罪予測部会の行なって来た作業を更に発展させる。とくに、警察統計にかんがみ1974年から1979年の犯罪の傾向についての予測研究を1974年5月15日迄に行ない、更に同年9月1日迄に、従来刑事訴訟手続内で採用されていた諸点とは別個の面で予測可能性を調査する方向で、予測研究を更に発展させる観点を提出し、できれば具体的提案をなす。また、この作業を社会福祉の領域内で行なわれる同種の作業と結合する可能性を調査する。この部会はその他、統計と予測の問題につき本委員会を援助する。
- (3) 情報部会：委員会の執行部の指示にもとづき委員会の外部への情報活動を援助する。さしあたり、受刑者に対する態度と粗暴犯罪とについて情報収集活動がなされている。
- (4) 麻薬部会：国の内外の麻薬問題の展開を追求する。この部会は他の関係官署と協力して活動するほか、麻薬乱用を薬物乱用全体の一部として図式化する。この部会は麻薬問題の国際的活動におけるスウェーデンの協力機関となる。
- (5) 社会福祉、学校、警察の協力部会：児童福祉委員会、学校、警察のインテンシブな協力と少年犯罪に対する措置のための協力とを課題とする。この部会はまた各地方の犯罪防止活動の改善のためにも活動する。とくに、犯罪防止をその課題とする諸機関の間の協力、国と自治体との協力、これらの協力に関する地方での試行的活動の企画と評価、この領域での新しい中央の指示の必要性の検討も行なう。
- (6) 学齢期の少年の間の犯罪防止部会：生活環境又は余暇環境の欠陥あるいはその他の理由で不健全な発達をする危険のある学齢期の少年に対する犯罪予防措置を検討、提案する。とくに少年の間の社会的予防活動で現在用いることのできる社会的資源の研究、コミュニケーションの余暇活動施設の研究、少年の成長に対する文化環境と余暇環境の研究、学校の生徒保護とコミュニケーションの社会福祉と余暇活動との犯罪防止面の協力の追求、この領域での、法律の制定・改正の必要性の検討などを行なう。
- (7) 受刑者の社会復帰援助部会：社会、団体、個

人の各々の側面から受刑者の社会への再適応を促進し、容易にするための活動を行なう。とくに受刑者を国の機関または国の補助機関に就職させるための規定の適用状況の追跡、受刑者の再雇用について労働組合内部の情報活動の追跡、社会復帰の観点から労働市場全体の状況の研究と判断、受刑者の再適応の際のニードと資源の判断を行なう。この部会長にはL Oの議長が当てられている。

- (8) 法律及び裁判所部会：学校教育の中での法律と裁判所に関する教育を探求し、促進するための活動を行なう。これは主に学校監督庁の職務領域の仕事に関係があり、本部会は法と裁判所に関する教育の学校監督庁による継続的实施に注意を払う。他の出発点は義務教育期間中の法と裁判所と題する白書で示された提案と意見とである。とくに一般的な生徒保護活動の基準と目標及び法と裁判所についての教育の基準と目標並びに既成の研究作業及び実施作業にかんがみ、幼稚園での法と裁判所についての教育のモデルの作成、この部会の作業領域での実施作業の発議、高等学校における法学教育の内容及び構成の検討、生徒の人格の発達に対する学校の責任を念頭においた教員教育の内容と形式との検討、学校における法と裁判所に関する教育及びこれに直接関係のある教員教育について、警察、社会福祉、余暇機関、矯正保護、裁判所、検察庁の協力に関する措置の提案、適当な教材の作成を促進するために必要な研究と試行の発議を行なう。

- (9) 刑事政策部会：刑事立法は本質的には現在とは全く異なった生活条件の下に制定されていることを前提とし、刑事立法が現在の社会の発展と歩調を合わすように委員会は活動しなければならない。そこで、本部会はこの課題の実現方法を検討する。とくに、本部会は、委員会の刑事政策的シンポジウムで交わされた議論にかんがみ、現行刑法の基礎にある価値観を修正する理由の有無を検討しなければならないし、その必要があれば、本部会がかかる修正の実施方法について提案しなければならない。その最初の報告を委員会の次の総会迄に提出しなければならないことになっている。

× × ×

この包括的な委員会の活動が現在どのようにす

すんでいるのかは、まだ詳報に接していない。

しかし、犯罪問題にスウェーデンが国を挙げて取り組む姿勢を打出していることは明らかであ

る。その成功を心から祈ってこの紹介の一文をおえたい。(本稿は“Brottsförebyggande Rådet, en ripresentation”によった。)

アサール・リンドベック教授を迎えて シンポジウム、研究会など開催



スウェーデン国際経済研究所長、ストックホルム大学教授アサール・リンドベック博士は、前号でもご紹介しましたとおり、去る10月15日来日され、同月25日帰国されましたが、その滞日中に行われた主な催しは、次のとおりでありました。

10月16日には、当研究所主催で、経済成長と福祉に関する日瑞共同研究についての打合せが、10月17日には、慶応義塾大学主催で、統一国家と国際経済体制と題した講演会が、10月18日には、当研究所の主催で、経済成長と福祉の日瑞比較に関するシンポジウムが、10月21日には、日経研究センター主催で、経済成長と福祉の日瑞比較と題した講演会が、また、10月22日には、スウェーデン大使館と当研究所の共催で、国際経済問題に関する研究会が行われた。

以上の催しには、いずれもテーマに関係深い学界、新聞界、経済界の専門家が多数参加され、活発な討議も交され、極めて高い成果があげられた。

ことに10月18日、日経研究センター会議室で行われた当研究所主催のシンポジウムは、日経研究センター理事長金森久雄氏、朝日新聞論説委員小林節失氏、東北学院大学教授高橋正雄氏、拓殖大学教授堅山利忠氏、スウェーデンの経済ジャーナ

リスト・ホーカン・ヘッドバーク氏ほか各界の権威多数の参加を得て、当研究所理事、中央大学教授丸尾直美氏の司会により、経済成長と福祉の日瑞比較をテーマとして行われたが、経済成長を犠牲にせず福祉国家の形成は可能であるとの結論に至るリンドベック教授の論説は、参加者に深い感銘を与えた。

同教授は、その説明の中において、日本とスウェーデンの間には、共通点も少くないが、国際化の度合い、技術開発への取り組み方、政府の役割などの面で、かなりの相違点があり、それが経済成長と福祉との関連において、スウェーデンの場合と問題解決の事情を異にしていることを指摘した。

特にその点で目立つのは資源配分の違いで、日本では製造工業部門への投資が多いのに対して、スウェーデンでは、住宅、病院、老人ホーム、学校など公共部門への投資や、社会保障関係費が多い点で、それにも拘らずスウェーデンは、経済成長をつづけながら福祉国家を実現した。それにはスウェーデンの産業界の姿勢の在り方や労使間の話し合いの事情などが大きく貢献している。しかし、その事情の裏には、税負担の問題や公共サービス部門の拡充にともなう行政費の膨張など、困難な問題の在ることを指摘された。

以上は同教授の説明の一部であるが、同教授の滞日中発表された幾多の所見が、わが国の今後の成長発展に大きく貢献することを期待するとともに、多忙のうちに当研究所の招きに快く応ぜられ来日された厚意に、この紙上を借りて感謝の意を表します。

(10月18日開催のシンポジウムにおける同教授の講演内容は雑誌「経済往来」(11/9発行)からの転載により、本月報の次号でご紹介する予定であります)

日瑞留学生を囲む会での

スピーチの紹介 (第2回)

当月報の5号でご紹介しました、去る5月10日に開催された日瑞留学生を囲む会で行われた日瑞両国の留学生のスピーチは、各研究内容や生活体験を含めた極めて興味深いものでありましたので、当月報7号より紹介を始めました。

今回は、その第2回ですが、昭和48年2月より3ヶ月間現地研究をされた東京芝浦電機KK技術研究所の沢田芳夫氏と昭和48年4月より1ヶ年間現地研究をされた京都大学工学部原子核工学教室助士の中村尚司工学博士のスピーチ二編を掲載します。

My Experience in Sweden

Ladies and gentlemen!

It is my great pleasure to have an opportunity to talk about my experience in Sweden.

My name is Yoshio Sawada, and I work for Tokyo Shibaura Electric Co.

I made a small research with regard to High Voltage Direct Current Transmission in Chalmers Institute of Technology in Gothenburg city. I stayed in Chalmers Institute for three months last year under the supervision of Professor Knudsen. First of all, I would like to express my acknowledgement to Japan-Sweden Foundation for giving me the opportunity to study in Sweden. Furthermore I am very much obliged to Mr. Hornmark of the Royal Swedish Embassy, and Mr. Berglund and Mr. Ringström of Sweden-Japan Foundation. They made a very kind support for my visit to Sweden.

For the first part of my speech, I would like to talk about my technical research in Sweden.

As you may know, the history of HVDC transmission is not so long as compared

Yoshio Sawada

with that of AC transmission. Therefore the technical data in this field is not sufficient in Sweden as well as in Japan. The electrical phenomena I dealt in Chalmers is a quite new problem which has been found during a long term out-door test of insulators in the DC laboratory of Chalmers Institute of Technology.

I am afraid I have to omit the technical detail, because we don't have time enough for that.

I made a series of simulation experiments in cooperation with the engineers of Chalmers.

As a result of the investigation, I got the outline of the phenomena. However it is quite regrettable that I couldn't go into further detail because three months were not satisfactory for this purpose.

In addition to my own research, my stay in Sweden was also very useful to get instructive informations, as Sweden is a pioneer country in this field. Anyhow I am convinced that my experience in Chalmers has been very useful not only for my personal investigation but also for the whole advance of the HVDC technology in Japan.

The high voltage laboratory of Chalmers Institute is not so large in the scale, but the striking feature of this laboratory is to be highly DC oriented. As far as DC problem is concerned, this laboratory, in my opinion, is one of the most excellent ones over the world. Therefore I have been very happy to study in that laboratory.

Apart from my personal investigation, I have been deeply impressed with Swedish way of research. My first impression in Sweden was that Swedish researchers were conducting their investigations very relaxed without any obstruction from others. I think this enables the originality of their research. On the other hand, in Japan, we are competing with others, and likely to get irritated. Perhaps this is partly because there are too many engineers and researchers in Japan. Some people say competition always makes good results as a whole. I think, however, this is not necessarily true. Next I would like to point out the excellent surroundings for research. For instance, as I mentioned before, the high voltage laboratory is not so large in its scale even as compared with those in Japan. However this laboratory is very effectively arranged to utilize to a great extent.

Besides Chalmers Institute, I also visited other laboratories and firms in Scandinavian countries. My impression above mentioned has not been changed through these visits, Now I would like to give my general impression about Sweden. In general Swedish people are very kind to foreigners. This is not a compliment to them. As a matter of fact, I had had some special images of Sweden and Swedish people, before I arrived in Sweden. This is just because Sweden is very Famous for many things such as high level of social welfare and taxes and so forth.

Before I left for Sweden, I read some books on Sweden, and these guide books

brought me many features of Sweden. After I arrived in Sweden, I found out that some of these were obviously overstatements. According to my observations, Sweden is really a very comfortable place to live in. But at the same time Sweden is not a special country at all, and people there were looking for the same kind of happiness which we Japanese want to get, although the way of getting it is a little different from ours.

Here I would like to talk about some aspects of daily life in Sweden. Above all I should like point out the individualism. As I mentioned before, Swedish people are very kind to foreigners especially in an official situations. I haven't had any uncomfortable experiences in Chalmers Institute. However it was very difficult to have a private contact outside the college. This was not because I was a foreigner there, and I found out that the situation was almost the same even among the porsonnel of Chalmers. In this context, I asked one of my friends in Chalmers, He had the same feeling, and furthermore he was not satisfied with such a situation. He told me that he knew nothing about the private lives of his colleagues. I would say, this kind of situation can not happen in Japan. On the other hand, everyone bothers the others too much through the private contacts in Japan. I cannot say which situation is better. The most important thing of all is that everyone going to Sweden should keep this difference in his mind.

Last of all I would like to give some suggestion for the newly-screened researchers. I would like to recommend them to study the general aspects of Sweden in advance, for instance the geography, historical background, present economical and political status of Sweden and so forth. This is particularly useful for the shortterm researcher just like me. Very fortunately

I could borrow some books from the Japanese Institute for Social Studies on Sweden.

Finally I should like point out that the amount of financial support from Japan-Sweden Foundation would be quite reasonable

if the researcher could rent a flat near the university. Fortunately it would not be so difficult to rent a flat in Sweden.

Thank you very much!

No	Item	Description
1	Name	Yoshio Sawada
2	Firm	Heavy Apparatus Engineering Laboratory Tokyo Shibaura Electric Co.
3	Organization where I stayed in Sweden	Chalmers Institute of Technology (Gothenburg city)
4	Period of staying in Sweden	February~May (1973) (3 months)
5	Theme of Investigation	High Voltage Direct Current Transmission
6	Professor	Professor Niels Knudsen of Electrical Engineering Dept.
7	Organizations besides item 3	1. ASEA Co. (Sweden, Ludvika) 2. Swedish State Power Board (Sweden, Stockholm) 3. STK Co. (Norway, Oslo) 4. EFI (Norway, Trondheim) 5. NTH (" ") 6. Gotland DC converter station (Sweden, Visby) 7. Konti Skan DC Converter station (Norway & Sweden)

滞瑞の印象

My Impressions of Sweden

中村 尚 司

Takashi Nakamura

1973年4月から1974年4月までの1年間をすごしたスウェーデンでの研究生活および日常生活についての種々の経験を報告する。

私はNyköping郊外のバルト海に臨む Studsvik にある AB Atomenergi の原子炉物理部門に客員研究員として滞在した。この研究所は政府出資約50%、AB ASEA Atom 出資約50%によって運営されており、1,000人弱の人々が勤務しているスウェーデン唯一の原子力研究機関である。原子炉物理部門は15人余の人々から成り、Pressurized Zero Power Reactor を用いて時々実験が行なわれているが、研究活動の約75%は計算それも主に炉心計算である。研究所とはいっても会社の雰囲気濃厚で、朝は8時に仕事を始め、昼休みは11時すぎから12時すぎ、ティータイムは2時半から3時、帰りは4時半と時間がきちんとしている。さらに又各人が会社等から委託された期限付きの仕事をいくつも受持るととても忙しそうなおこと、ここでの仕事のかなりの部分が商業ペースになった応用研究で秘密であること、研究員の平均年齢が高く若い人が少ないことなどは大学とは異質の空気なのではじめの間とまどった。

来た早々に仕事を与えられのんびりする暇もなく2次元直交炉心セルに対する衝突確率法による積分型中性子輸送方程式の数値解析の研究を始めたが、これは非常に基礎的な研究であり、今後の私の研究にとっても有益なものなので喜んで着手した。この研究はこの部門のプロジェクトとして以前から準備がすすめられており、この方法に基づいて作製されるべき計算コードにも、すでにCOXYという名前がついていた。この方面の仕事は私にとって初めての経験だったので、まず基礎的な本および衝突確率法に関する文献を読むことから出発し、指導者である Dr. Häggblom のレポートを解説し、修正し、改良するという順序で研究を進めていった。これに並行してCOXYコード作成の準備がなされたが、このCOXYコードのうちで衝突確率を計算する部分は私自身でプログラムを組みこの研究所にある計算機でテスト計算を行い、残りの炉心セル中の中性子束分布および出

力分布の計算の部分は Mr. Ahlin がコード化して両者を結合した。コードの有用性を調べるためにいくつかの具体例について他の計算方法に基づくコードと比較した結果、COXYコードは計算精度および計算時間速度の点でほぼ満足すべきものであることが判明した。コードが完成し研究が成果をおさめたのでこれまでの研究結果は所内レポートに発表され、又アメリカの原子力学会が出している Nuclear Science and Engineering という雑誌に投稿されることが原子炉物理部門の方針として決定された。

日常生活の面を一口でいうならばよく組織化されていてとても暮らしやすかったといえよう。研究所の Administration Office には外国人研究員のために公私にわたる世話をしてくれるスタッフがいて実に親切にして頂いた。住居は研究所が持っている1DKのアパートがスウェーデンにくる前にすでに用意されていたし、8月に妻と2人の子供が来てからはすぐに2DKに変えてもらえた。2DKといっても広さは日本でいうと4DKより大きい位であり、家具や台所道具もすべて完備していて何を買わなくてもすぐに生活できるようになっていた。又10月からスウェーデン政府がアパート代を収入額、家族構成に応じて値下げすることに決定し、おかげで我々も月150 Kr の補助をもらって大いに助かった。

物価は日本に比べて全般に高く、特に食料品では野菜、果物が高く又交通費も2~3倍であった。すぐ近くに ICA, Tempo, DOMUS といったスーパーマーケットがあって買物にはとても便利で、しょう油はどの店でも日本製の売られていて日本食に飢えることもなくおいしい酪農製品を味わうことができたし、銀行や郵便局なども夕方6時まで開いているのは通勤者にとって好都合だった。研究所は Nyköping の町から25km余り離れていて毎日研究所のバスで通った。町の中にもバスが走っているのでふだんの生活には車は不要であり、結局1年間車なしで過ごしたがとくに不便も感じなかった。ストックホルムまでは月に1度か2度観光やら買物に出かけたが1日6回しか

走っていない自動車を利用したり、研究所のバスが平日はストックホルムまで往復しているのをそれを利用したりした。車を持たなかったために時々研究所の人があちこち車で観光につれていってくれたので、余計その人達と親しくなることができよかったと思っている。

研究所の人々には又よく自宅でのパーティーに招待してもらった。日本のように男同士で飲みにいったり、宴会をしたりするのと違ってこのホームパーティーは我々にとってスウェーデン人の生活を知り交流を深める意味でほんとうによかった。各家庭の趣向をこらした美しい室内装飾や御自慢の家庭料理をたんのうさせてもらえたと、あちらの人々の生活様式が分って大いに参考になった。このホームパーティー方式を日本ででもとり入れようと試み始めている所である。スウェーデンでは満50歳になると盛大に誕生祝をする習慣があるらしく、私の滞在している間に、私の部門で3人の人の50歳の誕生パーティーに招待された。部門の皆がお金を出しあって贈り物をし、御当人の家で部門の人達や知人・友人が集まって飲食し、語り合う楽しい集いであった。

1年間位の滞在ならスウェーデン語は習う必要がないと研究所の人がいうのでずっと英語で通してきた。あちらの人は英語を話せる人が多く又上手なのでふだんの生活にはそれでほとんど困ることはなかった。ただ老人や子供達と話せないことと新聞やテレビが全く分らないことが困った点でやはりその国の言葉と話せるのにこしたことはないと思う。研究所で昼食の時の雑談において皆がスウェーデン語で話しているのを1人だけ意味も分らずぼんとしてバックグランドミュージックのようにきいているのは辛かった。英語に切り換えてくれた途端に暗やみからさす一条の光のように話が分ってくるというのは何ともいえない不思議な経験であった。スウェーデン語はドイツ語に一番近く、英語にも又よく似ているので、両者との類推でよく意味を判定したものだ。

以上のような言葉の障壁のために日々のニュースから離れたいわばロビンソン・クルーソーのような生活を送っていたのだが、それでも我々の滞在中にも大きな出来事はいくつもあった。とくに印象に残っているものとして国王の死去、総選挙、石油危機があげられる。前の2つはどちらも9月に起ったのだが、国王の枢はこの

Nyköping の町も通ったので見に出かけた。通りは人であふれるばかりで喪服に身を固めた人や涙を流している老婦人もあって国民の信望の厚さを感じさせられた。総選挙については日本にも報道されたらしいが、スウェーデンは完全比例代表制であり党に投票するので日本のようにポスターや選挙カーのはんらんはないし、札束の乱れとぶこともない静かなもので見ていて気持がよい。しかしそのかわりテレビでは党首討論会をよくやっているし、又よく集会が持たれていた。郵便投票が認められている点もあろうが投票率が90%を越えているのにも驚かされた。一般に政治意識は非常に高いのであろう。石油危機は一時非常に深刻な社会問題となり給湯制限がうわさされ、照明の節約も行なわれたが暖冬異変に助けられたこともあって結局給湯制限はなくガソリンの配給制度も1ヶ月ほどで終り、室内暖房も23℃位から21℃位に下っただけで大した影響もなくすぎた。ただこれをきっかけにして石炭も石油もなく日照も少ないスウェーデンにおいて原子力発電の重要性が再認識され、研究所の人達が安心して一面もあった。一時スウェーデンで Antinuclear Movement が勢いをまし研究所や Nyköping の町でも原子炉の安全性についての公聴会が開かれ新聞でもよくその記事がでていたのだが、石油危機を境にその勢いがやや弱まったことは事実である。現在スウェーデンではアメリカ型の PWR、BWR の原子力発電所が10基建設又は計画中であり、そのうち1基が稼動を始めている。

スウェーデンでのこの1年間をふり返ってみると、5月から9月にかけてのさわやかでよく晴れた時期は快適そのものであり、花は次々と咲き乱れ、森は緑にむせかえり、木の実や花や茸とりに散策にと楽しい思い出にみちあふれているが、10月頃から翌3月頃までの6ヶ月近くも続くものすごく寒くて暗く長い冬は我々日本人にとって時には耐えがたいこともあった。スウェーデン人は非社会的で恥かしがりなので外国人にとって住みにくい所だということを当のスウェーデン人からしばしば聞かされ、実際アパートのまわりではその通りほとんど孤立してくらしていたが、研究所の人達からほんとに親切にして頂いたので疎外感を味わうこともなく家族ともどもスウェーデンでの快適なアパート生活を楽しむことができた。家族といっしょにくらしたことはほんとにいいことだ

ったと思っている。又研究の面では、私の仕事は原子炉物理部門のプロジェクト研究であったため企業秘密という多少の制約をうけ外国人である私にとってやややりづらい点はあったけれども、その反面いろんな人から多大の援助を受け私1人で

していたらとても到達できない所まで達することができた。しかも私にとって未知の分野に踏み込むことができた点で1年間の研究生活は予想以上に実り多いものであったということができよう。

7月14日記

最近のスウェーデンの経済・社会ニュース

今年のスウェーデン経済、上昇に向う。

輸出・個人投資及び消費が主導

スカンジナビア・エーンシルダ銀行 (Skandinaviska Enskilda Banken) は6月のスウェーデン経済に関する月報のなかで、スウェーデンの経済活動が活発化に向っている、という徴こうが、昨年から大幅に失業率の低下した労働市場を中心にあらわれていると述べている。同銀行の報告では、ここ3年間にはじめて、求人が求職者の数をこえている。

さらにまた、こうした産業活動の力から生じた楽観主義は、このほど上提された予算案に、実質で4.5%の上昇を予想している事にもあらわれていると、同報告書は述べている。この成長率は、過去数年間の低い成長率とはげしい対象をなしており、さらには他の工業諸国のほとんどの国の予測成長率とも大きな差異を示している。

今年の経済発展で最も活動する分野としては、輸出、民間企業投資、及び民間消費であろうと考えられている。輸出は量的にみて6.5%上昇し、一方民間企業投資は主として産業投資が9.5%上昇するものと考えられている事によって全体で6%の上昇を示そう。昨年と異り、在庫増も今年の経済拡大に貢献しよう。

個人消費は需要を作り出す最大の要素となる。全体としての賃金上昇は12%に達するものと考えられる。経済刺激策とあいまって、この賃金の上昇によって家庭あたりの収入は15%以上に達しよう。消費者価格が9~10%上昇すると仮定しても、可処分所得は5.3%ほど上昇しよう。

こうした国内経済活動の上昇によって、輸入量は9%以上も増加しよう。

国際貿易に予測される価格の急激な上昇によって、今年の貿易収支は大幅に悪化するものと推定される。貿易収支は現在までの出超分8億クローナを含めて、年間で約17億クローナ程度の出超にとどまろう。これは昨年と比較すると58億クローナ(3,770億円)の収支悪化である。

日産1,200台の積みこみ用パレット生産
能力をもつ新装置開発さる

雑誌トランスポート・アンド・ハンテリングスエコノミー誌 (Transport & Hanterings-Ekonomi) の伝える所によれば、北部スウェーデンにあるドロテア・エンバラーシュインダストリー社 (Dorotea Emballageindustri) は、世界で最初と称する積みこみ用パレットの完全自動製造装置を稼働させ始めた。

総工費70万クローナ(4,550万円)に達するこの工場は、わずか5人の工員で作動し、日産1,200枚のパレットを生産できる。従来の装置で同じ数量を生産するには15人の人手を要すると言われる。

この5人のうち2人は必要な寸法のボード板を機械に送る仕事をし、一方残る3人は機械の監督にあたる。

この自動装置はヤーソン・マシネル社 (Jason-Maskiner) 製で、ドロテア社を所有している原材料取扱いの専門業者であるスウェーパル (Swepall) 社の手で販売される。

現在この種のパネルは約1,000万枚がスウェーデンで使用中であり、その平均耐用年数は4年である。一枚の市価は約35クローナ(2,335円)程度と同誌は述べている。

ASSI社、エレプロ製紙会社を取得

スウェーデンの国有林産業グループであるスタテンス・スコグインダストリエール社 (AB Statens Skogsindustrier) は、エレプロ・パップシュブルーク社 (Örebro Pappersbrnk AB) を取得したと、スウェーデンパルプ及び製紙業連合会 (Swedish Pulp & Paper Association) は公表した。

取得金額は2億6,000万クローナ (169億円) と伝えられている。

エレプロ社は同グループ内の独立会社として営業をつづける。同社の所有する森林は、同地域内にある林野庁 (Forest Service) の森林と合同される。これによって中央スウェーデン地区にある原材料林の資源は、より有効に利用されることになろう。

エレプロ社はまた、年産24万トンまで増強できる能力をもった硫酸パルプ工場を有し、さらには機械パルプ、紙及びボード紙、紙袋の生産設備も有している。

このASSI社はスウェーデン最大の引きわった軟材とファイバーの建築用ボードのメーカーでその年産能力は71万立方メートルと20万トンである。同社はまた毎年38万トンのクラフト・ライナーを生産する欧州最大のメーカーの一つでもある。

年産400万トンの製鉄所建設、国会で認可

スウェーデン国会は最近、北スウェーデンのルレオ (Luleå) にあるNJ A製鉄所に、年産約400万トンの生産能力をもつ国有の製鉄所を建設するという政府提案を承認した。この総費用は、約46億クローナ (2,990億円) と推定される。

このストールヴェルク80 (Staluerk80) と呼ばれる計画は、これまでスウェーデンで実行されたもののうちでは最大の単一事業である。これによって約2,300人の人に職が与えられると共に5～6年ほどかかる建設期間中に毎年約3,000人の従業員を必要とするであろう。この計画は、保守党は私企業の参加した独立製鉄所の方を希望はしたものの、全ての政党が賛成した。

この計画について産業相であるルネ・ヨーハンソン氏 (Rune Johansson) は、新製鉄所の生産

力の4分の3程度のものはスウェーデン国内に十分な市場があり、さらには現在の諸外国からの種々の問合せからみて、海外からの注文で工場全体の生産能力は、優にオーバーするであろう、とのべている。

昨年この計画が衆知の事実となって以来、経済学者と専門家のある人々は、こうした市場予測は「あまりにも楽観的」と批判しており、さらにはこの新製鉄所による新しい雇用の発生についても疑問をいだいている。

海外で活躍するスウェーデン企業、約250社に達す

スウェーデン産業連盟 (Federation of Swedish Industries) が英文で刊行した28頁の小冊子、「スウェーデンの多国籍企業」によると、スウェーデン全体の輸出の3分の1は代表的企業が、さらに半分を22の大企業でしめている事が分った。

スウェーデン人口との対比でみると、海外で活動しているスウェーデン企業は極めて広汎な活動を行っており、スウェーデンをしのぐ国は、わずかにオランダとスイスのみである。但し、スウェーデンの多国籍企業は小型のものが多く、と同小冊子のはべている。

もし販売のための子会社を含めると、海外で何等かの活動をしているスウェーデン企業の数は、約250社に達する。但し、これ等のうち最大の10社で、全体の従業員の4分の3以上をしめている。1972年にこれ等の10社が雇用していた359,600人のうち、192,900人、つまり54%の人々が、海外の子会社で働いていた事になる。

中国の製鉄所向けのとりべ炉

最近、北京の中国機械輸入公団 (China National Technical Import corp) がスウェーデンのアセア社 (ASEA) に対して行った注文に基づき、ASEA-SKF型のとりべ炉で、鉄鋼の脱ガス及び精製用のものが2基、中国に納入される。この総額1,700万クローナ (11億500万円) の装置は、1975年8月に引渡される。

この2基の炉はそれぞれ30トンと100トンの金属を溶解するためのものである。関連する真空装置はアセア社グループの一員であるスタール・ラヴァール・アパレート社 (Stal Laval Apparat

AB) が製造する。

鉄鋼の精製用のこの種の炉は1960年代なかば頃に開発され、世界の主要製鉄会社に提供されてきた。この炉を用いると均一な品質の不純物の少ない鉄ができるという性能が、大きな関心を引きおこした特色の一つになっている、と同社はのべている。

救助用専門に改作した軽飛行機

サープスカニア社 (Saab-Scania) の公表によれば、同社が製造したサープ・MF I ・多目的軽飛行機は特に改造されて災害にあった地域に援助物資を送るための新しい配達システムの重要な役割をこなすことになった。これは現在、食糧危機になやむエチオピアに、毎日 6,000 キロのとうもろしの種子をまくのに用いられている。

この全金属製のピストンリング・エンジンを用いた飛行機の特徴は、肩の部分に翼をもつ構造と T 型の尾翼にある。極めて高い強度を有するこの飛行機は、1~5メートルという超低空を約 110km/h の速度でとび、300キロまでの物資を極めて正確にとどけることができると言われる。

物資は翼の下に固定される特殊な使いすてのコンテナに入れて運搬される。これは目標地点上空で切りはなされ、数フィートの誤差内で着地する。これによってパラシュートを用いて高々度からズック袋に入れて落下させるのよりもはるかに正確になる、と同社は説明している。

この新しいシステムは大型の飛行機やヘリコプターを用いる方法に較べると、はるかに安価につく。同機の離着陸は極めて短距離ですみ、視界は良好で上昇性能もすぐれていると言われる。

カール・グスターヴ・フォン・ローセン伯 (Count Carl Gustav von Rosen) を長とするエチオピアでの緊急援助活動については、さらに研究がすすめられて、将来の民用の航空機の利用のための開発計画の基礎となる。この航空機の利用計画には肥料散布、ULVの農業用散布、さらには48人分までのいかにや生存用キット投下などがあげられている。

コッカムス社の新製品、大型の荷台傾斜式トラック

スウェーデンでこれまで造られたものとしては最大といわれる、40トンの積載能力をもつ新型の

荷台傾斜式トラックが、3年のテスト期間をへて、このたびコッカムス社 (Kockums) トラック部門によりスウェーデンで発売された。

このコッカムス・445 とよばれる新型トラックは性能中心に設計された2人乗りの自動車部分と、くさび型をした傾斜部分をその特色としている。このトラックは極度に重い建築資材や鉱山業の仕事に用いるためのものとして設計された。

現在の計画によれば、今年中にスウェーデン国内で24台の販売を予定している。その後は、海外でも販売する予定であると同社はのべている。

スウェーデンの新しい国有銀行、活動を開始

スウェーデンの二つの国有銀行であるポストバンケン (Postbanken) とスヴェリエス・クレディートバンク (Sveriges Kreditbank) の二行は、7月1日に合併してスカンジナビア最大の商業銀行となった。公式にはポスト・オック・クレディートバンク (Post-och Kreditbanken) とよばれるこの銀行は、一般には PK 銀行 (PKbanken) と呼ばれよう。

同行の資産は330億クローナ (2兆1,450億円) をこえ、世界の最大100行中に入ることになる。預金は290億クローナ (1兆8,850億円) をこえ、資本金は6億5,000万クローナ (422億5,000万円) である。

一行は純然たる商業銀行であり、他の一つは商業と郵政面にも手を出していたこの二行は、その財務活動では長い間にわたって協力をつづけてきた。クレディートバンクに口座をもっている人は、5,500にのぼる郵便局及びステーションに於いて預金の出し入れができるし、一方ポストバンケンの預金者はクレディートバンクの142の支店で商業銀行としてのサービス機能を利用できる。

この新銀行の顧客はスウェーデンの他のいかなる銀行よりも多いであろう。スウェーデンの給与の大半は銀行を通じて支払われる。同行はこうした口座120万一つまり全体の約半分相当一を取扱うことになる。

工業用排水浄化の新システム

スウェーデンの電機会社であるヴェステロース (Västerås) にあるアセア社 (ASEA) は、工業用排水から磁性及び非磁性の微粒子をとりの

ぞく、極めて高性能な新システムを開発した。完全なプロトタイプは、アセア社の子会社であるスラハンマーシュ・ブルーク社 (Surahammars Bruks AB) のストリップミル工場にとりつけられている。

汚染された排水はこのシステムへと送られ、そこで線状沈澱化タンクに入る。磁性をもった微粒子ももたない微粒子も、そのタンク内部で一緒に溶解して磁性をもった線状沈澱物となる。この現象は特別に開発されたもので、小型の濃縮剤として排水に加えられるポリエレクトロライトによって生じる。

排水自体に適切な線状沈澱物を生じせしめるに足るだけの磁性をもった微粒子が含まれていない場合には、磁鉄鋼又は他の粒子の細かい磁性をもった物資を加える。この方式によって、磁性をもった微粒子を全く含まない水でも、このミマグナディスク (Magnadisk) と呼ばれるシステムによって浄化することが可能となる。

この後に排水はシステムの中央部分である新型の磁性ディスク・フィルター装置に送られる。排

水はいくつかの薄い平行したディスクの間を流れて、この個々のディスクには多くの永久磁石がとりつけられている。全ての磁性をもつあるいは磁性化された一粒は、この排水に対してゆっくりと回転することによって粒子を表面に近づけるディスク上の永久磁石にとりつくことになる。

ディスク上にたいせきする泥はディスク同士の間にある空間内で動くエンドレスベルトによってかきおとされ、ついで排土タンクにすいあげられて処理される。

いくつかのテストの結果では、フィルターにかけた後の残留物は1リットルあたり10~25mgにすぎない。これはこの浄化した水を再使用するのに十分な基準に達している。

同社の言によれば、このミマグナディスクシステムは極めてコンパクトなものである。一時間あたり500立方メートルの排水を処理できるシステム一式は、わずか25平方メートルの場所にとりつけることができる。これと較べると、同じ性能をもった従来の沈澱池は、500平方メートルの場所が必要である。

新刊の紹介

至誠堂新書58

福祉とは何をする事か

スウェーデンを場として福祉国家の現実を探り、その財政、経済システム、都市対象、教育問題、価値観の変化等、多面的アプローチ

スウェーデン社会研究所編
350頁 定価980円 6月25日発行

発刊の辞 西村 光夫

序 高須 裕三・丸尾 直美

第一章 スウェーデン福祉国家の社会経済史的背景

第二章 選ばれた体制

第三章 スウェーデン式ウエイオブライフ

第四章 福祉社会の担い手たち

第五章 福祉政策と年金

第六章 教育による自由と平等の推進

執筆 者(執筆順)

高 須 裕 三	丸 尾 直 美	加 藤 良 雄	永 山 泰 彦	河 野 道 夫	内 藤 英 憲	菊 池 幸 子	小 野 寺 百 合 子	中 嶋 博 洩	荒 井 潤 子
---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	-------------	---------	---------

〒101 東京都千代田区鍛冶町1-3 電話(03)256-8121 振替東京97579 至誠堂